

メデイア人脈を考察する

——戦中・戦後の三つの「事件」から

飯田 いいた 和郎 かずお
(一般社団法人アジア調査会理事)

第3章 日中国交正常化の扉を開く

第4節 贖罪意識 2人が共有するもの

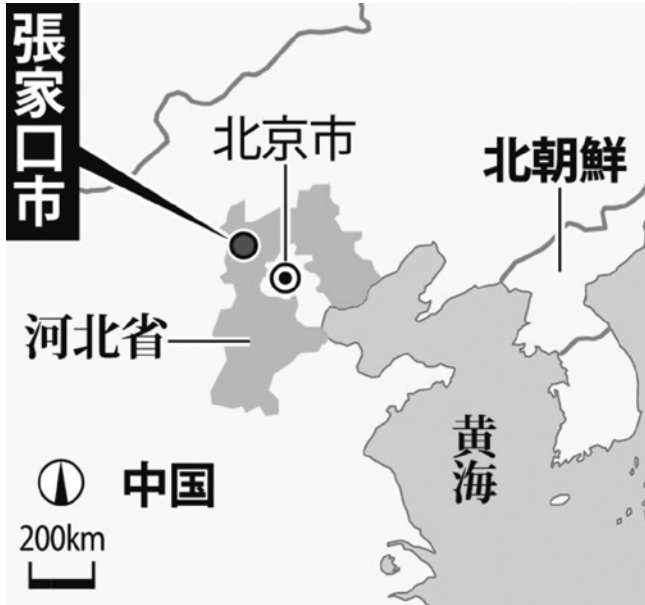
9月25日(月) 北京へ出発(機中)

朝食に和食をとり、昼近くになってそばが出る。

10時40分中国大陸が見える。「あれが大陸か」という外務大臣の声には、昔中国にいたことのある人のみが持つ親愛の念がこもっている。²⁰⁴

外務大臣、大平正芳の娘婿で秘書の森田一が書き記した日記の一部である。「9月25日(月)」とは1972年、大平が時の首相、田中角栄とともに、歴史的な中国訪問を開始したその日を指す。一行を乗せ、羽田空港を発った日本航空特別機は九州から東シナ海を横切り、上海上空に達した。窓から見下ろす景色が海から陸に変わったところ、大平が漏らしたひと言を、森田は書き留めた。

ここからは、「あれが大陸か」のひと言を端緒に、大平正芳の対中観の根源を解き起こしていきたい。このひと言



【図23】張家口の位置

には、遠い過去の記憶とともに、時を経てこの大地を再訪する感慨が交錯していたと考えられる。そして、「昔中国にいたことのある人のみが持つ親愛の念」は、大平が抱いた日中国交正常化への原動力と大きく関連する。
大蔵官僚だった大平正芳は1939（昭和14）年5月、

興亜院への出向を命じられ、張家口（現在の中国河北省）にある出先機関、蒙疆連絡部の経済課に赴いた。興亜院とはその前年38年に創設された日本の政府機関の一つ。日中戦争により増えた、中国大陸での占領地を管理・運営することを目的にしており、トップの総裁は首相が兼務した。
「張家口という街は、木の全くない、いわば「土の街」である。」²⁸⁶大平正芳がのちに回顧した張家口は、乾燥した大地がどこまでも続き、日々、砂あらしに覆われるという過酷な自然環境にあった。

厳しい条件下ではあったが、大平が得たものは少なくなかった。張家口での勤務はわずか1年5カ月。だが、若き大蔵官僚の視点から「大平にとって国家の『原型』²⁸⁶というようなものを勉強するには、またとない機会となった」わけだ。張家口は大平を中国に極めて精通した官吏に成長させる場となった。森田一は「中国の風土や中国民族を知るといふ意味においては当時の経験は非常に勉強になったのだと思いますね」²⁸⁷と語る。そして、政治学者、香山健一は「この若い時期の在外経験を通じて、その脳裡に刻まれた日本の大陸経営と中国農村社会の現実との矛盾についての自覚は、政治哲学のレベルのみにとどまらず、やがてのちの日中国交正常化交渉の際の、大平の毅然とした政治姿勢や日米関係、日中関係を基軸にした環太平洋連帯構想という政策構想にも通ずることとなる」と位置付けた。²⁸⁸20代で

の海外勤務は、「外」を見る目を養った。

張家口での経験は、このほかにもあった。大平正芳が個人の心の中に秘め、当時は口に出すこともなかった経験は、国交正常化に向かう、もう一つの大きな要因だった。大平が所属した蒙疆連絡部では、日本による軍政が敷かれた。そのため「現地の行政に圧倒的な実力をもっていたのは、何といっても軍司令部で、若い尉官や佐官クラスの参謀が、その権力を誇示していた」²⁰³。

張家口を含む華北・東北部は関東軍の統治下にあった。森田一は「軍隊が強くて、関東軍の影響が強くてですね、軍人がサーベルをじゃらじゃらさせて、全然話が違って、いるというようなことを大平はよく言っていました」²⁰⁴。「威張り散らす日本の軍人が現地の中国人をひどく扱っていた。大平はそれを再三目撃していた。そんな思い出話を大平は繰り返ししていました」²⁰⁵と証言する。「とりわけ占領地のように、支配、被支配が明らかなどころでは、権力を笠に着た軍人が響響を買うような振舞いをする人が多いが、大平はそれに強い嫌悪の念を覚えた」²⁰⁶わけだ。

日本は軍人によって国家運営が主導されていた。森田一は、筆者とのインタビューでこんな話まで披露した。「大平はこうも言っていましたよ。『もし戦争に勝っていたら、もっと日本には悲惨な将来が待っていただろう。だから、負けてよかったんだ』²⁰⁷。それは軍人による国家支配も懸念

してのことだろう。

ここまで、大平と中国をつなげる原点、そして原体験を追ってきた。若き官僚として国家運営の一端を担っていた当時の大平は、自分がのちに政治家に転じ、中国と深く関わるとは思いもしていなかったかもしれない。その大平を国交正常化へと突き動かしたものは、国際環境の変化だけではない。若き日、張家口で見聞きした光景にそのヒントがある。

Guilty Consciousness (ギルティ・コンシャスネス)。日本語に訳せば「贖罪意識」に相当するだろうか。日本は中国の国土を蹂躪し、そこに暮らす多くの人々の生命や財産を奪った。国交正常化後、見返りを求めることなく、技術支援を惜しまなかった日本の企業家の多くは当時、同じ贖罪の思いを共有していた。政治家も同じである。

大平正芳は、田中角栄内閣での外相就任会見で「日中は利害関係ではうまくいかない。近隣の関係でイビツなものをまともにするからです。それを正すのが日本外交の義務なんです。得だからやる、損だからやらないという問題では考えられない」²⁰⁸と対中外交のスタンスを明らかにしている。また、前述した自身の論文「日本の新しい外交」においても「経済的援助は、これまでともすれば経済権益に結びついたり、政治的ないしは領土的野心に結びついたりしがちであった。(略)われわれは、そのようなこ

とを考へてはならない。經濟援助はあくまでも援助であつて、政治的投資ではないはずである」と言い切つてゐる。「政治的ないしは領土的野心」が、過去の日本の侵略戦争を指すのは明らかだ。

大平正芳に尻を叩かれるように、北京行きを決断した田中角栄も中国大陸への出征経験を持つ。1939（昭和14）年から翌40年までの1年半、一兵卒として旧満州国のソ連国境で任に就いた。田中は通産相だった72年3月23日、衆院予算委員会で自民党衆院議員、川崎秀二から問われ、自身の中国出征体験を紹介したのち、こう答へてゐる。

私は、中国大陸に対してはやはり大きな迷惑をかけたという表現を絶えずしております。これは公の席でも公の文章にもそう表現しております。迷惑をかけたことは事実である、やはり日中国交正常化の第一番目に、たいへん御迷惑をかけました、心からおわびをしますという気持ち、やはりこれが大前提になければならないという気持ちは、いまでも将来も変わらないと思ひます。

時期、それに立場は異なるが、田中角栄と大平正芳はそれぞれ20代で中国を経験している。正常化交渉において大平に仕えた当時の外務省中国課長、橋本悠は証言する。「角さんも大平さんも、あの当時の日本人の一人として、中国

に對してね、ずいぶん罪のない中国人をひどい目に遭わせたという、いわゆるギルティ・コンシヤスネス「罪の意識」を共通に持つていました。しかし、中国に對するこのギルティ・コンシヤスネスが一番強烈なのが、大平さんだったと、私は思つてゐるのです」

田中角栄と大平正芳は北京滞在3日目、中国側の案内により、乗用車で北京北郊の八達嶺に赴いてゐる。八達嶺は、首都から最も近い万里の長城の觀光地だ。この時、首相・周恩来を司令塔にした中国側との交渉は暗礁に乗り上げようとしていた。気分転換の意味合いを持つ小旅行だった。

「長城では、すたすた登る田中首相と違つて、大平外相の足取りは重く、口数も少なかった。『昔、この八達嶺を通じて張家口に行つたものだ。夜汽車が多かつたな』というのが、長城でもらした一言だったが、大平外相の脳裡には当面する問題でいっぱいようだった」。確かに、大平正芳の頭の中は交渉の行方で大半が占められていただろう。だが、このひと言には大平の深い感慨がこもつていたと推測できる。

北京から北西へ伸び、包頭（内モンゴル自治区）を結ぶ鉄道・京包線の途中に八達嶺があり、その先の鐵路は張家口に至る。かつて夜汽車に揺られ、業務のため張家口と北京を何度も往復した大平正芳は、八達嶺で自らの中国との原点、原体験を思い出し、それから派生した贖罪意識と



【図24】 田中香苗が他界する4日前に肉声を残したテープ＝筆者撮影

ともに国交正常化交渉への闘志を沸き立たせていたに違いない。気分転換のはずの小旅行は、小さくない意義をもたらしたはずだ。

毎日新聞社長などを務めた田中香苗の二女・平田早苗が保管する父の遺品の中に、3本のカセットテープがある。このうち1本はラベルに「Oct 9 85」と記されている。1985年10月9日に、田中が入院先の「順天堂病院のベッドに仰向けに寝ながらテープレコーダーを両手で支え、色々なことを録音していた」ものだ。80年の生涯を閉じる4日前の収録だった。

再生すると、しっかりした声で、よどみなく自身の生涯を振り返る田中香苗が現れる。「好きな時にものを書き、好きな時に旅行をし、メシが食える方法はなんだろう。(略)いろいろな就職案内にも応ぜず、ふと、ある日、毎日新聞から採用の依頼の通知があったので、毎日新聞へ行くことに決めた」³⁰⁰。東亜同文書院を卒業し、毎日新聞入社時の経緯を語る。1929(昭和4)年のことだ。

国内勤務を経て、念願の中国での駐在はその2年後。奉天³⁰¹での特派員生活は31年4月に始まった。同じ年の9月、田中は同地で起きた満州事変に、駐在記者として遭遇する。カセットテープには奉天赴任当時を回顧する場面が残って



飯田 和郎（いいだ・かずお）氏

1960年生まれ。関西学院大学経済学部卒業後、1983年毎日新聞社入社。佐賀支局、西部本社報道部を経て91年に東京本社外信部。北京特派員、台北支局長、中国総局長（北京）、外信部長など。2013年RKB毎日放送（本社・福岡市）に移り、報道制作センター長、専務取締役などを務めたのち23年に退職。在職中から福岡市の西南学院大学院国際文化研究科修士課程に通い、本稿を修士論文として提出（『アジア時報』用に改題）、24年3月修了した。一般社団法人アジア調査会理事。

いる。

そのころ、排日事件は頻発しておる。私は日本の軍人というものは、日露戦争当時の立派な軍人であると思ひ込んでいた。（略）したがって満州の毎日・排日事件というものは、ほんとうにけしからんと思つていた。しかるに事情が次第にわかつてくるにおいて、なんと、こう痛ましいことだろう、と。日本軍は墮落しておる。この行方は怖いという気持ちになつたが、我々にはどうすることもできない。³⁶

大平正芳とは異なる

立場ながら、田中香苗もまた日本軍人の横暴ぶりに失望していた。中国への贖罪意識は、東亜同文書院に在校した者の多くにも共通する。第2章で取り上げた松野谷夫が学生時代に目撃した場面³⁶にあるように、学校が所在した上海で、また4年次に研修で訪れる大旅行での行く先々などで、彼らが見聞した中国の姿は、のちに一人ひとりの中国との向き合い方に大きな影響を与えた。田中も同じだ。東亜同文書院の同窓会組織、滬友会の会長として、創立80周年記念誌に巻頭言を寄せている。

書院が存在した上海は、四億の民を擁する広大な中国と、世界を結ぶ政治・経済の一大中心地であった。同時に治外法権に護られた外国租界の設定によって、列強の中国進出の根拠地となり、人種のルツボとして異常な繁栄と頹廢の都市ともなり、中国と中国人民にとっては屈辱の都市でもあった。（略）書院に学んだ学生たちは、この複雑特異な都市上海を通して世界の大勢を知り、中国人の苦しみに参加し、中国の憂悶と前途への希望を、我が事として体得することができた。³⁷

上海という複雑特異な都市において、高い知的好奇心を持った若者たちは学内での机上の学習だけではなく、学外で平和や民族の平等を尊ぶ姿勢を、身体で感じていたとい

うのである。

毎日新聞社で田中香苗の部下だった山内大介は「中国問題に対する田中さんの基本的認識はすでに同文書院時代に基盤がつくられ、その後新聞記者として、複雑な国際関係を冷厳に見据えながらバランス感覚を養ってきたものである」と論じる。つまり、東亜同文書院を源に中国専門記者としての経験が蓄積されたというのだ。しかも、それは日本と中国という単線の関係ではなく、国際社会の思惑が広がり、重なる面や立方体の中で、より重層さを加えていったということなのだろう。山内は田中が「中国社会の本質ともいべき封建性、停滞性、後進性に同情を寄せる一方で、ナシヨナリズムの高揚を高く評価するという柔軟な視点だった」と分析する。山内の言うナシヨナリズムとは今日の狭義の愛国主義ではなく、民族自立の意味合いを持つのだろう。

ただ、「封建性、停滞性、後進性に同情を寄せ」たのは、多分に日本人として、また戦前の中国問題専門のジャーナリストとしての贖罪意識からもにじみ出ている。同じく田中香苗の部下だった宮本喜久二は、田中について「基本は中国の国家民族を尊重し、庶民の生活に多分の愛情を抱き、それが一貫して失われなかったのである。」と上司を見つめていた。

284 森田一『大平正芳秘書官日記』（東京堂出版、2018年4月）43頁。

285 大平正芳『私の履歴書』（日本経済新聞社、1978年7月）47頁。

286 公文俊平・香山健一・佐藤誠三郎監修『大平正芳 人と思想』（大平正芳記念財団、1990年6月）86頁。

287 森田一『心の一燈 回想の大平正芳 その人と外交』（第一法規、2010年3月）31頁。

288 香山健一「第四章 大平正芳の政治哲学」（『大平正芳とその政治 再論』、大平正芳記念財団、2020年10月）226頁。

289 前掲、大平正芳『私の履歴書』48頁。

290 満州などに駐屯していた日本陸軍部隊。日露戦争後、関東州と南満州鉄道の権益を保護するために設置された関東都督府を前身とし、1919（大正8）年独立。第二次大戦の末期に、ソ連軍の侵攻により壊滅。

291 前掲、森田一『心の一燈 回想の大平正芳 その人と外交』31頁。

292 2023年11月10日、筆者が森田一に行ったインタビューから。

293 前掲、公文俊平・香山健一・佐藤誠三郎監修『大平正芳 人と思想』（大平正芳記念財団）86頁。

294 前掲、2023年11月10日、筆者が森田一に行ったインタビューから。

295（無署名）「田中政治の潮流 主要閣僚にきく（1）」（『毎日新聞』、1972年7月8日朝刊）2面。

296 大平正芳「日本の新しい外交」（『硯滴考』「4」、大平正芳記念財団、2019年6月）22頁。

297 満州事変により中国東北地方を占領した日本が1932年、清朝最後

- の皇帝溥儀（宣統帝）を執政として建国した傀儡国家。首都は新京（今の長春）。34年に溥儀の皇帝即位によって帝國となり、45年、日本の第二次大戦敗戦とともに消滅。
- 298 （無署名）『第六十八回国会衆議員予算委員会第四分科会議録（農林省、通商産業省及び労働省所管）第四号』（衆議院、1972年3月22日）10頁。
- 299 服部龍二『日中国交正常化 田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦』（中央公論新社、2011年5月）46頁。
- 300 前掲、服部龍二『日中国交正常化 田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦』313頁。
- 301 田中家子供一同「想」（回顧 田中香苗）田中香苗回顧録刊行会、1987年8月）11頁。
- 302 田中香苗の生前の声を記したカセットテープから。
- 303 現在の中国遼寧省瀋陽。満州国では首都・新京に次ぐ拠点都市だった。
- 304 1931年9月18日、奉天北方の柳条湖における鉄道爆破事件を契機に始まった関東軍による満州（中国東北部）侵略戦争の日本での呼称。若槻内閣は不拡大方針をとったが、一方で日本は経済的にも軍事的にも満州占領を望み、軍は政府の方針を無視して満州全土を占領、翌2年3月に満州国を樹立した。中国では「9・18事変」という。
- 305 前掲、田中香苗の生前の声を記したカセットテープから。
- 306 飯田和郎「上海・東亜同文書院 メディア人脈を考察する」連載第4回（『アジア時報』通巻600号、アジア調査会、2024年10月）37頁（ウェブサイト版22頁）下段参照。
- 307 田中香苗「歴史の声——序にかえて——」（『東亜同文書院大学史』創立八十周年記念誌）292頁。
- 308 山内大介「刊行の辞」（回顧 田中香苗）v頁。
- 309 宮森喜久二「評伝」（回顧 田中香苗）88頁。